

平成 25(2013)年度

NGO 海外スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2014年3月14日
氏名	伊藤 正芳
所属団体	特定非営利活動法人ミレニアム・プロミス・ジャパン（認定 NPO 法人）
受入機関名（所在国）	MDGs Center(West Africa) /Millennium Village Project, Ghana
研修期間	2013年12月11日～2014年3月11日

研修テーマ	セネガルの MDG センター及びガーナの Millennium Village Project (MVP) に学ぶ MDGs 達成のための効果的な取り組みと手法
全体研修目標	MPV は、MDGs を達成するための具体的なロードマップを示した貧困撲滅のためのプロジェクトスキームであるが、昨年の東アフリカにおける研修に続きセネガルの MDGs センターとガーナの MVP 活動に参加することで貧困撲滅のための個別かつ具体的なノウハウを学び、その知見を MPJ にフィードバックさせ、日本の NGO における MDGs 達成のための活動促進に寄与する。

具体的な研修内容

1. MDG センター(セネガル;西・中央アフリカを統括、写真1)での聞き取り等

- ・セネガルのミレニアム・ビレッジであるポトゥーでのプロジェクト概要についてオリエンテーションを受け、またその他の資料にあたった。
- ・活動の継続に向け調査を行う担当者は、継続する仕組みをつくるために一番大切なカギは、現場の人々の意見を聞くことだとしている。

[保健医療]

現在は無料となっている診療所を支援プロジェクト後も継続していくために、相互扶助型の健康保険組合を企画していた。メンバーは組合維持のための少額の会費を月々負担し、罹患時には本人と組合と政府とで費用負担するというもの。

[農業ビジネス]

相互扶助型組合は農業分野でも可能だ。自給自足農業と商業農業を分けて考えた場合、とくに自給自足農業では組合が適しており、ビジネスの度合いが高まればマイクロクレジットのスキームなどで維持拡大可能だ。

2. ポトゥー(セネガルのミレニアム・ビレッジ)現場視察

- ・2006年にプロジェクトが開始された。それ以前から存在する自治会や青年会、住民有志とも協力し、活動が進められてきた。今回滞在時には「第4回パンアフリカユースリーダーシップサミット」として、全アフリカ大陸の諸国から200名を超える青年視察団を招き入れており、こういう形でもミレニアムビレッジプロジェクトという開発モデルの知見が各国に持ち帰られる(写真2)。

[保健医療]

プロジェクト以前には1か所しかなかった診療所は、いま6か所になり、医療へのアクセスは格段に改善されている。訪問した1か所では乳児への予防接種を行っているところだった。実施率も目標管理されており、グラフは100%に達していた。

また別の診療所では、そこで使われる水をろ過する装置を見せてもらった。日々のメンテナンスも看護師ができるようになっていて(写真3)、支援の効果が続いていく見込みがあると感じた。

[教育]

小学校での手洗い啓発運動 (WASH プログラム) を視察した。

手を水と石鹸をつかって洗うという習慣を広めるために、診療所や学校を接点として啓発活動が行われている。小学校にはプロジェクトのスタッフが巡回して、生徒たちに実演指導をする。

(写真4)

[農業ビジネス]

この地域は一面砂地で、玉ねぎ、トマト、キャベツの灌漑農業を行っている。乾季のいまでも日照は強く、灌漑を行えば三毛作が可能だそうである。水を手でくみ上げる畑とポンプをつかって点滴灌漑を行う畑(写真5)の両者を視察した。点滴灌漑の導入によって人的生産性は10倍になるとのことで、さらなる導入を準備している井戸があり、その土地にも赴いた。また実際に鋤で土地を耕す作業も体験させていただいた。

また、マーケットの中心にあるマイクロクレジット機関を訪問した(写真6)。広くクラスター全体をカバーしている。

ポトゥーは大西洋に面しており、漁民も生活している。ここでは開始されて数か月の漁業組合があり、組合長(写真7)によるとファイナンス面で運営が滞っているという。しかしイスラム金融においてコーポラティブはアソシエーションよりも資金調達が容易であるといい、今後組合としてビジネス(例えば干物にするなどの加工)を運営する主体に発展していけるかが正念場だ。

3. ボンサソ(ガーナ中部のミレニアム・ビレッジ)現場視察

ガーナに2か所あるミレニアム・ビレッジのひとつであるボンサソのプロジェクト現場を視察した。ここは2006年に開始され、現地への活動引き渡しが比較的スムーズに進んでいる。

[保健・医療]

7か所ある診療所を補完する中央検査室(写真8)や遠隔医療センターが配置されており、少ないリソースでも効率的に機能するようデザインされている。

この分野では、グラクソスミスクラインやノバルティスといった民間セクターとのパートナーシップがあり、現段階の試験的な運営を支援している。現地政府がリソースの不足などにより新しい方法を試行錯誤することすら躊躇される場合、ミレニアム・ビレッジのモデルの効果が実証されることで、現地政府の政策への反映が促される。

今後は診療所・病院にかかる前に病気を予防することがトータルコストの削減につながる可能性があり、コミュニティヘルスワーカーの取組みを推進していく。

[教育]

地方政府教育庁との良好な関係のもと推進されており、プロジェクトでは認知向上のためのキャンペーンや学校給食の提供などにより、就学率向上に取り組んできた。(写真9)

その学校給食も、学校に隣接した畑を教師たちが中心になって管理し、給食に供されるプランテーションや現金収入源のカカオを栽培して補うようになっており、自助努力による維持が期待される。(写真10)

[農業ビジネス]

農業は村の主要産業であり、自給自足のレベルを超え現金収入を得られるビジネスのレベルまで引き上げていくことで、健康保険料(年800円)や教育費の支出の余裕もできるようになる。その意味でも、諸所の問題はクロスカuttingであり、単独で解決しようとしても、元に戻ってしまう可能性がある。包括的なアプローチが結局は継続性につながるといえる。

ここでは40~50名規模の組合の組成を促し、組合に対して農機具などの支援を行っている。(写真11)

4. SADA-MVP(ガーナ北部のミレニアム・ビレッジ)現場視察

ガーナ北部の MV である SADA-MVP の現場を視察した。ここは先行するボンサソの取組みに当時の大統領が注目し、2012 年サバナ開発促進庁 (Savannah Accelerated Development Authority; SADA) との協調のもと新たにスタートしたサイトである。開始後 2 年近くが経ちインフラや施設の整備が進んでいるが、現段階から今後の継続性にも留意した方法で取組みがなされている。各コミュニティとは繰り返しミーティングがもたれており、プロジェクトの意義や取組み内容を説明するとともに、コミュニティ側の役割分担についても話し合われる。(写真 12)

[保健・医療]

SADA-MVP は 2 か所の診療所を新設し、さらに検査室を増設する予定である。これに関し、当初の人材確保はプロジェクトにおいてなされるが、プロジェクトが終了し現地に引き渡されることを見据え、地域の中央病院との協調が図られている。プロジェクトで採用したスタッフの契約期間後も、引き続き適切な人材が赴任してくるよう、すでに中央病院との話し合いが始まっている。(写真 13)

[農業ビジネス]

ここでも組合の組成が促されている。その組合に対してマイクロクレジット機関からの与信が行われるよう、SADA-MVP 開始直後からプロジェクトがケアをしている。(写真 14)

また別途、農業組合のリーダーたちを 15 名ほど集め、新しい作物の試験栽培が検討された。これは、少ない種類の作物に依存することから脱却し、かつ高効率な農業ビジネスを目指すものである。

研修の成果

MDGs 達成のための効果的な取り組みであるかどうかを判断するポイントとして、現場におけるその活動が継続しているか、また今後も継続可能であるかがカギである。このような事例に多く触れることができ、そこからいくつかの共通点を見出すことができた。これら知見は他の支援活動にも応用可能であり、学びは大きかった。

1. 現場の好事例

[保健医療]

- ・看護師による浄水器メンテナンス
- ・コミュニティ有志による診療所清掃活動
- ・中央検査室、遠隔医療センターでの集中処理
- ・地域の中央病院と協調した人材確保
- ・健康保険制度

[教育]

- ・学校菜園による学校給食補填

[農業]

- ・灌漑農業による生産性向上
- ・農業組合組成とマイクロクレジットによる与信付与
- ・新たな高効率作物への取組み

2. 継続可能な活動の共通点

[政府に対して]

- ・当初より協働して取り組む。(保健医療セクター、教育セクターにおける公的部門との連携)
- ・少ないリソースで成果を上げられる効率の良い仕組みをデザインする。

(中央検査室、遠隔医療センター、コミュニティーヘルスワーカー)

・支援によらない独自の財源を開発する。(学校菜園、健康保険)

[コミュニティーに対して]

・個々人の習慣にまで落とし込む。

・コミュニティー側に活動の受け皿となる組織をつくり、一緒に取り組む。(自治会、農業組合)

・ビジネスとして拡大再生産のサイクルにのせ、加速させる。(マイクロクレジット、新たな高効率作物)

本研修成果の自団体の組織強化や活動の発展への活用方針、方法

本研修から得た学びから、支援活動を行う際の方針として下記を提案したい。

活動継続のためには、資源を継続して投入する必要がある。投入資源にはヒト・モノ・カネといった側面がある。

[ヒト]

裨益側のパートナー、リーダー、組織を選び、ともに活動を進めることが前提である。(受け皿となる主体が見つからなければ、ひとを集め、組織をつくることから始める。)

[モノ・カネ]

効率的な活動方法をデザインし、生産性を上げ十分な財源を開発することで、経済的な合理性を確保する。これが運営継続における設備・施設の維持や諸費用の捻出につながる。

本プログラムや事務局側に対する提案、要望等

本研修の機会を与えていただき、また期間中サポートをいただき、本当にありがとうございました。

私自身、本当によい経験を積ませていただき、得られた学びも大きかったと感じております。ぜひ、今後もたくさんのかたがこのような貴重な学びを持ち帰れるように、引き続きこの機会を提供いただきたく希望いたします。

その他

(写真1)MDG センター外観



(写真2)診療所にて説明を受けるパンアフリカユースサミット視察団



(写真3)浄水器をメンテナンスする看護師



(写真4)小学校を巡回しての手洗い指導



(写真5) 点滴灌漑農業による玉ねぎ畑



(写真6) マイクロクレジット機関



(写真7) 漁業組合の組合長への聞き取り調査



(写真8) 7か所の診療所の検査をカバーする中央検査室



(写真9) 県教育庁を訪問した MPV 教育セクターリーダー(右から 2 番目)



(写真10) 小学校で自主運営するココア畑



(写真11) 農業組合とのミーティング



(写真12) 村の 200 人以上が集まったミーティング



(写真13)医療人材確保に関して中央病院との打ち合わせ



(写真14)農業組合のミーティング



以上